

サハリンの植物相および植生から見たニヴフの植物資源利用

水島未記・白石英才・丹菊逸治

Key Words ロシア極東 (Russian Far East)、サハリン (Sakhalin)、ニヴフ (Nivkh)、植物利用 (Utilization of plants)、民族植物学 (Ethnobotany)

1 はじめに

筆者のうち水島は、北東アジア地域、特にサハリンおよびアムール地域の植物資源の利用を研究テーマとしている。中でもサハリンに居住するニヴフ（以下、「サハリン・ニヴフ」）については、2002年以来、1回2週間程度の調査旅行で10回を数えるフィールドワークを行い、近年は白石・丹菊と共同で調査を実施している。その中で多くの利用植物を確認し、その植物資源利用の多様性を明らかにしてきたほか、サハリン・ニヴフの植物資源利用を特徴づけるいくつかの点を指摘してきた。

本報では、これらの調査の蓄積の中で得た知見に総合的な考察を加え、サハリン・ニヴフの植物資源利用の特徴およびそれがサハリン北部の自然環境とどのように関わっているかについて明らかにする。以下、次のように論を進める。まず、サハリン北部の自然環境について、植物相および植生を中心に概説する。次いで、関連する先行研究をいくつか挙げ、その問題点について、これまでの筆者らの調査経験を踏まえて分析を加える。そして、筆者らの調査で見だし、これまで順次報告してきたサハリン・ニヴフの植物資源利用の特徴について改めて整理し、体系的に記述した上で、それがサハリン北部の自然環境、特に植物相および植生から受けてきた影響について考察する。最後に、その考察を踏まえ、アムール川河口地域の植物相・植生およびそこに居住するニヴフ集団（以下、「アムール・ニヴフ」）の植物資源利用について、サハリンとの比較を中心に若干の考察を試みる。

2 サハリン北部の植物相および植生

サハリン・ニヴフの伝統的な居住域であるサハリン北部の植物相および植生については過去の調査報告の中で個別に紹介してきたが、これまでの筆者らの調査経験および文献に基づき、ここで改めて整理し、概説する。

サハリン中央部には、「シュミット線」として知られる植物分布の境界線が北北西から南南東方向に走っている（図1）。この線はササ属 *Sasa* など多くの南方系の植物の北限となっており、この線より北側では、植物相により北方的な要素が増える。シュミット線以北の植物相は比較的貧弱であり、木本・草本とも種数が少ない。特に高木は種数が少なく、グイマツ *Larix cajanderi* とエゾマツ *Picea jezoensis* が主体である。広葉樹としては河畔を中心にヤナギ類 *Salix* spp. が見られるほか、シラカ

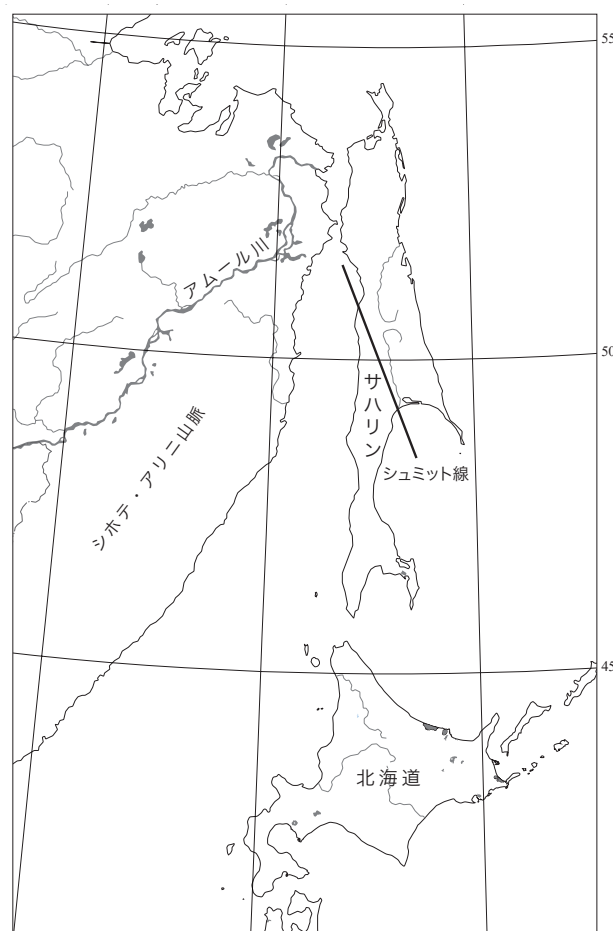


図1 位置図

ンバ*Betula platyphylla*、ヤマナラシ類*Populus* spp.、ナナカマド*Sorbus americana* subsp. *japonica*等の限られた種のみが見られる。

シュミット線は植生の境界ともおおむね一致しており、これより南側では森林植生としてはトドマツ*Abies sachalinensis*が様々な割合で混交したエゾマツ林(図2)が多いのに対し、北側では植生はより単調であり、グイマツ林が多くなる(図3)。シュミット半島以外では、北端に近づくにつれて圧倒的にグイマツが優占するようになるが、そのグイマツも場所によっては高木にはならず矮化し、疎林を形成する。そういったグイマツの疎林では、多くの場合ハイマツ*Pinus pumila*が中木層を占める(図4)。

また、低地では、現地で「ツンドラтундра」と呼ばれる湿原(泥炭地)が広い面積を占める(図5)。海沿いでは多くの場所で砂丘が見られ(図6)、特に東海岸(オホーツク海側)では砂州が発達し、潟湖が多く見られる(図7)。砂丘や砂州上では海岸植生が広い面積で見られるほか、ハイマツ林が発達する(図8)。

シュミット線以北の地域の中でも、特に北緯51~52度から北緯54度に至るエリアは、高い山がなく、全体が緩やかな丘陵に覆われている。このエリアには、広い範囲に渡ってアムール川が運んできた砂が堆積している(Матюшков *et al.* 2014)。このため、グイマツ林においても土壌の発達は極めて悪く、多くの場所では、厚く積もった砂の層の上をごく薄い土壌が膜状に覆っている程度である。実際、サハリン北部では、道路の開削などで表土が剥ぎ取られると、白い砂の層が露出し、なかなか植生が回復していないという光景を至る所で目にする(水島 2003)(図9)。泥炭地の多さも、基盤となる層が砂の堆積層のため貧栄養であるということが影響していると考えられる。このエリアは植物地理学的にも他とは区分され、「北サハリン区」としてまとめられている(図10)。

3 サハリン・ニヴフの植物資源利用

本章では、サハリン・ニヴフの植物資源利用に関連した先行研究をいくつか挙げ、それらについてこれまでの筆者らの調査経験を元に分析し、問題点、不足している点などについて考察する。また、それを踏まえて、これまでの筆者らの研究について概説する。

- 図2 トドマツが混交したエゾマツ林
- 図3 グイマツ林
- 図4 ハイマツを伴うグイマツの疎林
- 図5 湿原



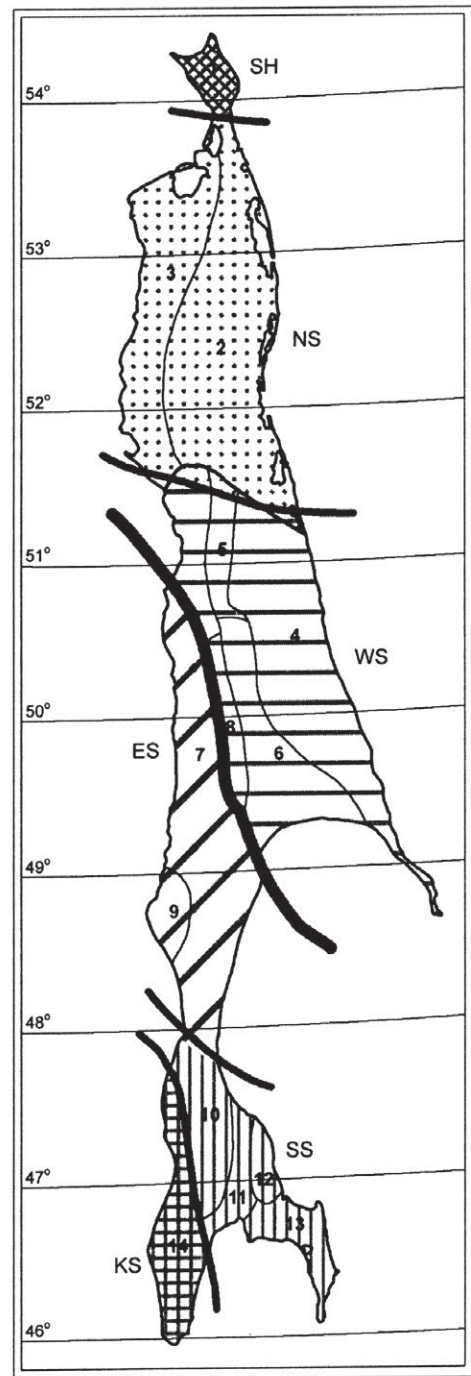


図10 サハリンの植物地理学的区分 (Крестов *et al.* 2004)
この図でNS (2と3) が「北サハリン区」であり、アムール川
が運んできた砂が堆積しているエリア。

- 図6 砂丘
- 図7 潟湖
- 図8 砂丘上のハイマツ林
- 図9 露出した砂の層

(1) 先行研究

生物資源の中でも、植物は哺乳類や魚類と比較して地域による構成種の違いが大きい。このため、利用する植物種の選択、利用目的、具体的な利用方法など、植物資源利用に関わる文化を構成する諸要素は、より強く周辺環境の違いに影響されていることが予想される。にもかかわらず、少なくとも北東アジア地域の先住民に関しては、従来の民族誌において、植物資源の利用についてはあまり注目されず、狩猟・漁労・トナカイ飼育等、動物資源の利用と比較してその価値が低く見積もられてきた傾向がある（手塚・水島 1997）。

ニヴフの代表的な民族誌であるとしては、しばしばクレイノヴィチ著『нивхугу』（Крейнович 1973）が挙げられる。クレイノヴィチはこの著書の中で、「食用植物・根菜・漿果の採集」に1節を割り、食用植物を中心とする多くの植物の利用について、調理法も含めてやや詳しく記述している。また、狩猟や儀礼に関する章の中でも、適宜、そこで使われる植物を紹介している。クレイノヴィチは食用を中心とした植物の利用について一定程度の関心を持っていたことがうかがえるとしても、筆者らが明らかにしてきた実際の植物資源利用の多様さからみると、森林での狩猟・海獣猟・漁撈を合わせた動物資源の利用と比較して記述の量は明らかに少ない。

加えて、民族誌においては、植物の利用に関する記述はあっても、種の同定が曖昧または不正確な場合が散見されるという問題があることも、狩猟や漁労の対象としての動物資源と異なる点である。多くの民族誌では、植物名は先住民の言語による呼称や記述者の母語による一般名称で表現され、それがどの植物種に当たるのか判断することが困難なものが多い。

『нивхугу』の原著はロシア語だが、クレイノヴィチは多くの植物についてロシア語名を特定できず、ニヴフ語名をそのまま用いて記述している。注で「残念ながら、ニヴフ族が食用にしている植物は学問的見地からはこれまで明らかにされていない。私はその同定のために植物標本を蒐集しようと思ったが、これを実現できなかった。」（文章は榎本哲訳による邦訳版『サハリン・アムール民族誌 ニヴフ族の生活と世界観』（クレイノヴィチ 1993）より）と書いているように、クレイノヴィチ自身、聞き取りで情報が得られた植物、あるいは料理等の形で実見した植物について、その同定のための標本採集の必要性までは認識していたのだが、実現できなかったようだ。

ロシア語の名称を記録している植物についても、多くの場合は、ロシアの植物学における標準的な種名（以下、日本での植物学における標準的な種名を表す「標準和名」という呼び方に倣い、「標準露名」と表現する）で

はなく、通称や総称的な名称を用いている。邦訳版（クレイノヴィチ 1993）ではさらに、ロシア語から日本語への翻訳段階での植物名の混乱が加わる。

例えば、同書に登場するロシア語名「лопух」という植物は、露和辞典では一般に「ゴボウ」のこととされており、邦訳版でも、これを「ゴボウ」と訳している。これについて中川（1990）は、クレイノヴィチの言う「лопух」はゴボウ *Arctium lappa* ではなくフキ（アキタブキ *Petasites japonicus* subsp. *giganteus*）のことだと推測している。筆者もほぼ同じ見解であるが、アキタブキに加えてポロナイブキ *P. tatewakianus* も含んでいる可能性があると考えている（水島・池田 2003）。クレイノヴィチが生まれ育ったヨーロッパロシアではフキ属植物は自生していないが、ゴボウは身近にあったため、同じような葉の形のフキ属植物をゴボウの仲間だと勘違いしたという可能性がある。一方で中川（1990）は、ロシアでも地方名・通称名として「лопух」がフキ属や、さらには「広い葉の植物すべて」を指す用法もあることについて引用し、そもそもサハリンのロシア語ではフキとゴボウの区別がされていなかった可能性についても触れている。クレイノヴィチがそもそもその植物をゴボウの仲間であると認識していたのであれば、邦訳版の「ゴボウ」という訳は適切と言えるが、フキである（＝ゴボウとは別の植物である）と認識した上で「лопух」という名称を使っていたとしたら、「ゴボウ」という和訳は不適切ということになる。

原著でニヴフ語名「к"ак"ф」（ニヴフ語の表記は原著のまま、以下同様）、ロシア語名「косяника」とされている植物を邦訳版では「イワイチゴ」と訳している。露和辞典では、「косяника」の訳としてしばしば「イワイチゴ」が充てられているが、少なくともサハリンにおいては、「косяника」はゴゼンタチバナ *Cornus canadensis* またはエゾノゴゼンタチバナ *C. suecica* のことを指す（水島ほか 2005）。この2種の標準露名はそれぞれ「дёрен канадский」・「дёрен шведский」である（Смирнов 2002）が、サハリンでは一般にこの2種を合わせて「косяника」と呼ばれる。クレイノヴィチが地方名を用いたために、邦訳の際にそれがどの植物に相当するのか特定できなかった例である。原著のニヴフ語名「ып"ых」、ロシア語名「сикса」はガンコウラン *Empetrum nigrum* のことである。ガンコウランの標準露名は「шикша сибирская」であるが、サハリンでは一般に総称「шикша」またはその変形である「сикса」と呼称され、クレイノヴィチは後者を用いている。これについては、邦訳時には和名を特定できなかったためか、「スィクサ」とロシア語名をそのまま片仮名で書かれている。また、ニヴフ語名「к"арк"」という植物をクレイ

ノヴィチはロシア語で「сарана」としているが、これはただ「ユリ」と訳されている。クレイノヴィチが種を特定せず、ユリ類の総称である「сарана」というロシア語名を使ったために、翻訳者も種を特定できなかったのである。これはサハリン北部の植物相を勘案すれば、エゾスカシユリ *Lilium maculatum* subsp. *davuricum* を指すと判断できる。

このような例は『нивхгу』だけでなく他の民族誌においても見られ、また、当該言語の辞書・語彙集等についても同じ問題を指摘することができる。例えば、ウイльта語の例だが、日本人研究者の編纂した2つの辞典（澗潟・北海道教育庁社会教育部文化課 編 1981；池上 編 1997）にはそれぞれ100以上の植物名が採録されているが、正しく同定されていないものが目立つ。

このような問題が起きるのは、狩猟・漁撈の対象となる哺乳類・鳥類・魚類と比べて、植物は種数が多く、かつ類似した種が多いということと関係していると考えられる。サハリンにおいては、自生する維管束植物（在来種）の種数は1,233種（Баркалов and Таран 2004）であるのに対して、哺乳類は小形種（食虫目・翼手目・齧歯目）を除くと13種である（Кривошеев 1984）。このため、植物の種を正しく識別し、名称（学名または植物学上の名称）を確定する作業（同定）には、より専門的な知識・スキルが必要であり、また、相応の文献資料との照合など膨大な作業量が必要となるのである。一般に、民族学分野の研究者はその必要な知識を十分に得ていないことが多いと考えられる。

そのような中で、かつてサハリン北部を中心に活動していた郷土史家コロソフスキーは、北東アジア地域の先住民について、その植物資源との関係に焦点を当てた研究を行っている。特にニヴフに関しては精力的に調査し、植物の呪術的な利用（Колосвский 1989）、薬用（Колосвский 1990）などの利用、クマ祭りにおける植物の象徴的意味（Колосвский 2004）などについて報告している。コロソフスキーは報告の中で多くの植物についておおむね種レベルまで同定しており、筆者が見た範囲では同定はおおむね正確と考えられる。また、同定できた植物に関しては、標準露名で記述しているのは特筆に値する。コロソフスキーは植物に関する知識もある程度有していることをうかがわせるが、これは民族学分野の研究者では例外的なことである。コロソフスキーの報告は、この分野の研究において非常に大きな価値を持つものである。

また、筆者らの研究期間と重なるが、ニヴフのイリーナ・オネンコ氏 Ирина Ивановна Оненко は、自身の民族の植物資源利用に興味を持ち、母親のリゼルタ・タイガン氏 Лизерта Васильевна Тайган をはじめ、周囲の古老か

らの聞き取り調査を続けるとともに、クレイノヴィチ、コロソフスキーなどの文献における記述を書き写し、ニヴフを主とした同地域の先住民の植物利用および名称についての情報を集積してきた。近年、これらの成果が『サハリン北部およびアムール地域の先住民が利用していた植物』として出版された（Оненко 2016）。掲載された情報には引用元または話者が明記されており、この地域の先住民による植物利用に関する百科事典的な内容となっている。

同氏には筆者らも何度かお会いしているが、聞き取りや文献による調査と並行して証拠標本となる植物を採集し、腊葉標本として残すなど、できるだけその植物の正体を明らかにしようと努める姿勢がうかがえた。例えばクレイノヴィチが「ar'c」または「ax'c」「a:c」というニヴフ語名で記録し、「пучка」というロシア語の通称名を紹介している植物について、アキタブキまたはポロナイブキとして紹介しているなど、同氏はそれまで文献上で正体が不明だった植物について同定を試みている。また、同定できなかった植物については巻末にまとめて掲載している。

オネンコ氏は、複数の情報源から得た情報を同じ植物と判断できる場合は統合し、すべての情報を植物種ごとに整理して掲載している。その際の統合の仕方等には若干の疑問点は残るものの、出版物として編集するに当たっては植物研究者が監修していることもあり、同定の信頼性は相当に高いと考えられる。今後のこの分野の研究に当たっては参照すべき文献となるであろう。

これらの研究により、サハリン・ニヴフがどのような植物資源をどのように利用してきたかという点については、徐々に明らかにされてきたと言える。その一方で、前述のとおり、哺乳類や魚類と比較してより強く周辺環境の違いに影響されているであろう植物資源利用について、ニヴフの居住地域周辺の自然環境、特に植物相や植生との関係という点まで踏み込んで考察した例は、先行研究には見当たらない。

(2) 筆者らの調査とその結果

水島は、サハリン・ニヴフを含めた北東アジア地域の先住民の植物資源利用について、フィールドワークによる調査を継続してきた（手塚・水島 1997；水島・池田 2000；水島 2000など）。調査の際には、聞き取り調査に加え、周辺環境の観察も実施し、植生・植物相等の概略を把握してきた。聞き取り自体も、極力、野外において自生状態の植物を前にして実施し、それが困難な場合でも、話者や筆者らが採集してきた植物標本を見ながら行ってきた。このような調査手法により、同定が曖昧または不正確という従来の民族誌の問題点を克服し、情報

が得られた植物について、大部分を種レベルまたは属レベルまで同定してきた。

例えば、ウイльтаに関しては最初のまとまった民族誌である『Уйльта Сахалина』(Роон 1996)では、トナカイ皮製の長靴の中に敷く草が「наукта」というウイльта語の名称で紹介されている。野外で実物を前にしながらの聞き取りにより、ワタスゲ *Eriophorum vaginatum* がこの「наукта」に相当することを確認できた(水島ほか 2005)。

一方で、正確に同定するためには、植物分類学的な分類体系のみを考慮するだけでは不十分であり、民俗分類についての情報も必要である。多くの場合、話者自身も植物学や植物分類の知識を体系的に学んでいるわけではないため、聞き取り調査で情報が得られる植物は、あくまで話者の認識している植物の「種類」であり、必ずしも生物分類学上の種とは一致しない。そのため、調査を進める中で、その時話題にしている植物の正体を特定するためには、その話者が(あるいはその民族が)その植物をどう認識し、現地の植物相という母集合の中でどのように位置づけているか、という点についても考慮する必要があるということを認識するに至った。

そのような視点に立ち、その植物についての話者の認識や、話者が用いる呼称などについての情報も、聞き取り調査におけるメタデータとして重視し、極力収集・記録することとした。特にサハリン・ニヴフについては、ニヴフ語を専門とする白石・丹菊と共同調査を行い、植物資源利用の実態についての詳細な情報に加え、植物名称、関連語彙などについても収集し、報告してきた(水島ほか 2007; 水島・田村 2008; 水島ほか 2009; 水島・白石 2011, 2013)。その中では、話者の認識している植物の「種類」と生物学的な種が一对一で対応しない場合、すなわち話者は同一の植物種を形質の違いで別の「種類」として認識している例や、逆に、異なる植物種を同じ名称で呼び、全く同一またはほぼ同一の「種類」として扱っている例についてもいくつか確認している(水島ほか 2005; 水島・田村 2008; 水島ほか 2009; 水島 2010; 水島・白石 2013)。さらには、ロシア語の植物名が表す植物種に地域差または個人差がある場合でも、ニヴフ語名称は地域・個人をまたいで一致する場合があることを指摘した(水島 2007; 水島・田村 2008)。

筆者らの調査により確認できたサハリン・ニヴフの利用植物は、藻類(海藻)、コケ植物から高等植物まで多種多様なグループを含む。具体的なデータについては既報(水島・池田 2003; 水島ほか 2005; 水島・田村 2008; 水島ほか 2009; 水島 2010; 水島・白石 2011, 2013)を参照いただきたいが、その数は、種レベルま

たは属レベルまで同定できたものだけで約40科・約70属、種数にして90種以上にのぼった。の中には、先行研究では利用が確認されていなかった種や、利用は知られていたものの正確に同定されていなかった種も含んでいる。これらの植物は、隅々に至るまで生活のさまざまな場面で、食用・飲用・薬用・儀礼用・道具材など多様な用途に使われており、また、ベリー類などのように、食料として非常に重要視されているものもあった。

話者たちは、それぞれの植物種に対応して、利用する部位や採集法、利用方法、保存方法、適切な採集時期や好適な採集場所などについての膨大な知識を蓄積しており、それを世代間で継承してきたことがうかがえた。オネンコ氏が集積したように、実際には、はるかに多くの利用植物があることが予想される。これらのことは、植物資源の利用が、生業としての重要性という点で、漁労や海獣猟に決して劣らないことを示している。

4 考察

(1) サハリン・ニヴフの植物資源利用の特徴

これまでの調査でサハリン・ニヴフの植物資源利用文化の全体像を明らかにしたとは言い難いが、それでも、フィールドワークの蓄積により、その特徴を少しずつ見いだすことができ、順次報告してきた(水島・田村 2008; 水島ほか 2009; 水島・白石 2011)。それらの特徴を整理して記述すると、以下のとおりである。

1) 湿原植物を多用すること(図11)

サハリン・ニヴフは、食用や飲用など各種用途のために、湿原植物を多用する。サハリン北部に多く見られる湿原(泥炭地)、特にミズゴケ湿原が、植物採集の場として極めて重要である。ホロムイイチゴ *Rubus chamaemorus*、クロマメノキ *Vaccinium uliginosum*、コケモモ *V. vitis-idaea*、ツルコケモモ *V. oxycoccus* など、後述するベリー類の多くは湿原で採取される。むかごを食用にするムカゴトラノオ *Polygonum viviparum* もやや乾いた湿原に生える。

2) 砂州・砂丘の植物を多用すること(図12)

(次ページ左列)

図11 ニヴフが利用する湿原植物

- a. クロマメノキの果実の採取
- b. 集められたホロムイイチゴの果実
- c. ミズゴケ上のツルコケモモの果実
- d. ムカゴトラノオのむかご

(次ページ右列)

図12 ニヴフが利用する砂州・砂丘の植物

- a. ハマナスの果実の採取
- b. タカネナナカマドの果実
- c. ヒメイワタデ
- d. マルバトウキ



砂州や砂丘的な環境に生える植物も、サハリン・ニヴフは生活の中で多用する。いわゆる海岸植物・海浜植物に限らず、砂丘上に成立しているガンコウランやハマナス *Rosa rugosa* 等ベリー類の群落（後述）やハイマツ林なども、植物採取の場として湿原と並んで重要である。海岸に生えるマルバトウキ *Ligusticum scoticum* は茎葉を食用にする。根を食用にするヒメイワタデ *Polygonum ajanense*（後述）も砂丘に生える。

3) ベリー類が非常に重要であること（図13）

漿果等の軟らかくみずみずしい果実、いわゆる「ベリー類」が、食生活の中で極めて重要な位置を占める。サハリンに自生するベリー類には多くの種類があり、そのほとんどを何らかの形で利用する。特にコケモモやガンコウラン、ホロムイイチゴ、クロマメノキ、ハマナスなど、特定の何種類かのベリーは、ニヴフの食卓にはなくてはならないものである。それも、「デザート」的な扱われ方ではなく、食事の一部として捉えられており、サケ・マス類などと並んで、「主食」と呼んでいいほどである。ベリー類は、前述した湿原や砂州・砂丘上に多く、特にミズゴケ湿原では多くのベリーが採取できる。何種かのベリー類は森林で採取される。

4) ユリ科植物の鱗茎が重要であること（図14）

エゾスカシユリ、クロユリ *Fritillaria camschatcensis* といったユリ科植物の鱗茎を、儀礼用の料理の材料としたり、あるいは儀礼の際の供物としても比較的重要視している。しかしながら、食文化の中での重要性はベリーほど高くはない。このほか、ケシ科のエゾエンゴサク *Corydalis ambigua* の球茎やタデ科のヒメイワタデの根など、いくつかの草本植物の地下部を食用にする。また、タデ科のムカゴトラノオのむかごについても食用にする。

(2) 植物相および植生との関わり

これらサハリン・ニヴフの植物資源利用の特徴は、前述したサハリン北部の環境と大きく関わり、その特徴を色濃く反映している。すなわち、湿原の多さや砂丘・砂州の発達が、植物採取の場としてのそのような植生の頻繁な利用をもたらしていると考えられる。以下では、サハリン・ニヴフの植物資源利用と植物相および植生との関係について、筆者のこれまでの経験と、既知の植物および生態学に関する知見を援用しながら、さらに詳しい



図13 ニヴフによるベリー類の利用

- コケモモの果実の採取
- ベリー類を材料とした料理（コケモモを使った「ムヴィムビ」）
- ベリー類を材料とした料理（クロマメノキを使った「ヴズグアルスВызгалс」）
- ベリー類を材料とした儀礼用料理（コケモモを使った「モスмос」）



図14 乾燥保存しているクロユリの鱗茎



図15 ガンコウランの高密度な群落

考察を加える。

一般的に極地や高山など劣悪な環境の場所では、植物相が貧弱、すなわち自生する植物の種類が少なくなる。同時に、その劣悪な環境でも生育できる特定の種については、個体数が多く、かつ、極端に優占し、高密度の群落をつくる傾向が強くなる。例えば日本（北海道）においても、高山帯では特定の植物（高山—寒地植物）が優占し、一般に「お花畑」と呼ばれる独特の景観を形成するのはよく知られている（水野 1999）。サハリンの湿原や砂丘の植生もこれに類似したものであり、コケモモやクロマメノキ、ガンコウランなどのベリー類が高密度の群落をつくり、「一面のガンコウラン畑」といった様子を呈する（図15）。

ある有用植物が極度に優占し、高密度の群落をつくるということは、植物資源の利用という面から見れば、単に資源量が大きく、大量採取が可能であるというだけではなく、採取の効率が非常に高いということを意味する。すなわち、少ない労力、少ない時間で大量に集められるということである。これがベリー類の多用という特徴をもたらしていると考えられる。

また、たとえ資源量が大きかったとしても、採取に必要な消費エネルギーがその植物の採取・摂食により得られる摂取エネルギーを超えるようでは、嗜好品的な利用、あるいはビタミンやミネラルなどの微量栄養素の摂取のための利用という位置づけに留まるであろう。しかしながら、採取の効率が高く、消費エネルギーを大きく超える摂取エネルギーが期待できるのであれば、多量栄養素である炭水化物源、すなわちエネルギー源として重要になり得る。言い替えれば、採集の効率（例えば単位時間あたりの採集量、あるいはさらに厳密に考えるなら、採集時の消費エネルギーに対する摂取エネルギー）がある一定の値を超えると、「デザート」ではなく主食的な利用が可能となると考えられる。ベリー類に関しても、サ

ハリン北部のように個体数が多く、かつ、群落の密度が上がると、単に採集量が増えるという量的な違いが生じるだけでなく、ある閾値を超えると、食文化における位置づけがデザートから主食に変わるという、質的な違いをもたらすと考えられるのではないだろうか。

一般に温暖な環境では、地下の大きな貯蔵器官（根茎や塊茎等）や地上部の肥大した茎に栄養を澱粉の形で蓄積する植物が比較的多く自生しているが、伝統的にはこれが重要な炭水化物源（澱粉源）となってきた。熱帯ではその傾向はさらに強まり、ヤマノイモ科やサトイモ科などの各種のイモ類、サゴヤシ属などのある種のヤシ科植物の茎の髓などは、世界中の熱帯地域において、野生植物の中で主要なエネルギー源となり、また、栽培植物の起源ともなっている（星川 1995）。これに対して、寒冷地では大きな澱粉貯蔵器官を持つ植物の割合は低く、サハリン北部ではほとんど見られない。これに代わって、ベリー類が炭水化物源の役割を果たしているとも見なすことができる。

北海道アイヌにおいては、オオウバユリ *Cardiocrinum cordatum* var. *glehnii* が食用植物として重要であったことはしばしば指摘される。ユリ科植物には、鱗茎や塊茎など比較的大形の澱粉貯蔵器官を持つものが多く見られる。しかも無毒の種が多く、毒抜きやあく抜きの手間をかけずに食用に供することができるため、世界各地で良質な食料として利用されている。中でもオオウバユリは一回繁殖型であることから、際だって大形の貯蔵器官を持つ。そのため、北海道に自生する他の澱粉貯蔵器官を持つ植物と比較しても、採取効率は非常に高いと考えられる。しかしながらオオウバユリはサハリン南部が分布の北限であり、シュミット線を超えて北までは分布していない（Смирнов 2002）。北海道アイヌが澱粉源として用いていた植物には他にもいくつか知られているが、いずれも貯蔵器官はオオウバユリほどの大き

さではない。また、その多くはニヴフの居住域であるサハリン北部には分布しないか、あっても非常に稀である。

その中で、エゾスカシユリとクロユリ、エゾエンゴサクは、サハリンの南端から北部まで連続して分布しており（スミロフ 2002）、特にエゾスカシユリとクロユリは、比較的大きな鱗茎を持っている。その上この2種は、サハリン北部においても海岸などの草原的な環境で比較的良好に見られ、しばしば群生するため、採取効率は比較的高いと考えられる。これらのことが、エゾスカシユリやクロユリが、澱粉源として重視されることと関連していると考えられる。一方で、食料としてはベリーほど重要視されないのは、可食部がベリーについては果実であるのに対してユリ類は栄養貯蔵器官であることと関係していると考えられる。すなわち、地上部の出現期間が比較的短いことも相まって1年あたりの成長量は比較的小さく、そのために採取圧に対する回復力はより低く、群落全体の生産性はベリーと比較して低いと推測される。

また、ムカゴトラノオのむかごは粒径が小さく、採取効率が低いと思われるが、これを利用するのも大き

な澱粉貯蔵器官を持つ植物が少ないことと関係していると考えられる。

湿原植物の多用、ベリー類の重視といった特徴は、シベリアやアラスカの北極圏など、より高緯度に居住する民族と類似している。前述のとおりサハリン北部にはアムール川が運んできた砂が厚く堆積しており、土壌の発達極端に悪い。このことが植物相および植生にも大きく影響していると考えられる。すなわち、湿原の多さ、植物相の貧弱さ、特に高木の少なさ、さらにはグイマツ林の成立そのものにも、この砂の堆積層が強く影響しているものと考えられる。そのため、植物から見た環境としては、緯度や標高から想定されるものよりもはるかに厳しく、より高緯度の地域に近いのである。すなわち、ニヴフの植物資源利用は、この砂の層により大きく規定されていると言える。

前述のとおり、先行研究には、ニヴフの植物資源利用について周辺の自然環境との関係という点まで踏み込んだ考察は見当たらない。これまでの民族誌においてはむしろ、精神性や価値観といった面に重きが置かれがちで

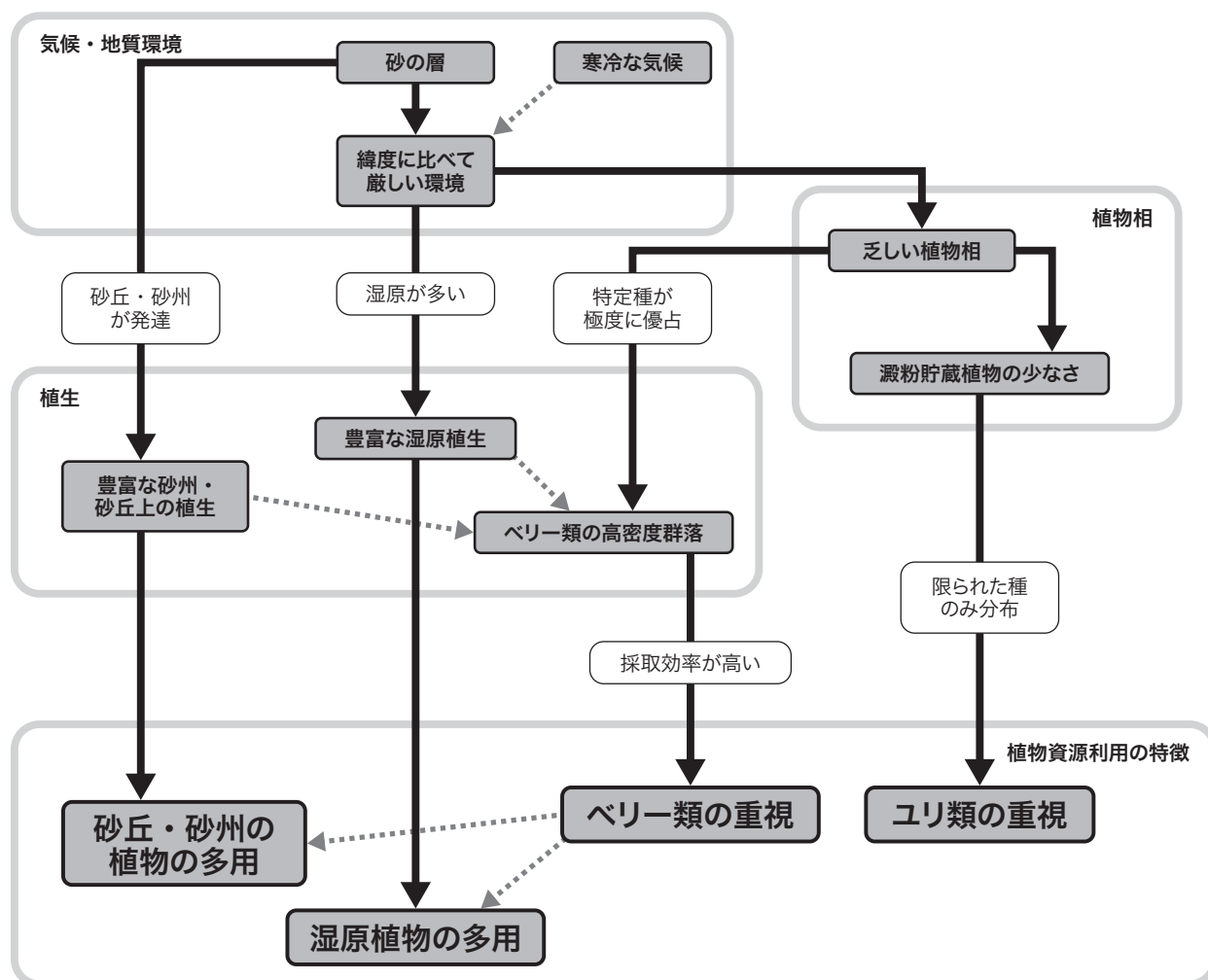


図16 サハリン北部の自然環境とニヴフの植物資源利用との相関（模式図）

あり、植物相や植生、さらには気候や地質等の環境からどのような影響を受けているのかについて注意が向けられることはなかったと言える。本研究では、ニヴフの植物資源利用の特徴が、植物相や植生を通じて、アムール川がもたらした砂の層という特殊な地質環境から大きな影響を受けていることを明らかにすることができた。これらの相関を模式的に描くと、図16のとおりである。

5 アムール・ニヴフとサハリン・ニヴフの相違（予報）

ニヴフの伝統的な居住域は、サハリンの中央部～北部と、サハリン北端とほぼ同緯度で対岸に当たる大陸側、すなわちアムール川河口域にまたがっていることが知られている。アムール川河口域は、サハリンの中央部～北部（シュミット線以北）と同じく、植物区系としては同じ周極針葉樹林区系に属する（Takhtajan 1986）。

しかしながら、植物相および植生に関しては、前述したサハリン北部の特徴が大陸側にはそのまま当てはまらなれないと考えられる。より南方に位置するシホテ・アリニ山脈では、広葉樹の樹種が多いなど植物相は比較的豊かであり、森林植生の多様度も高い（沖津 2002）。北側に隣接するアムール川河口域についてもこれに近い植物相・植生と考えられ、砂の層による影響が大きいサハリン北部とは異なっていることが予想できる。

従って、両地域の自然環境の違いをより詳細に確認するとともに、アムール側のニヴフについても、その植物資源利用の特徴を調査し、前述したサハリン・ニヴフにおける特徴と比較し、相互の類似点および相違点を明らかにすることで、植生および植物相などが植物利用文化に与える影響をより一層正確に推測することができると考えられる。これはすなわち、文化の地域的な多様性を、自然環境の多様性との関係から再検討し、環境と文化との関係性を考察することができるようになるということである。

以上を踏まえ、筆者らは、2012年から2015年にかけて3回、アムール川河口地域のニコラエフスク・ナ・アムールおよびその周辺（いずれもハバロフスク地方）において調査を行い、植生および植物相について若干の知見を得ることができた。また、ハバロフスクおよびアムール川河口地域において、短時間ではあるが、現地に住するニヴフの方から植物資源利用についての聞き取りも行うことができた。

植物相に関しては、サハリン中央部～北部に比べて豊かであり、特に木本の種数が豊富であることを確認した。前述のとおりサハリン北部では高木の種数が非常に限られるのに対して、アムール川河口域では、広葉樹の種数

が豊富であり、モンゴリナラ *Quercus mongolica*、エゾイタヤ *Acer mono*、ツノハシバミ *Corylus sieboldiana*、アラゲアカサンザシ *Crataegus maximowiczii* など、サハリンでは分布しない樹種およびおおむねシュミット線より南だけに分布する樹種を、比較的普通に見ることができた（図17）。植生に関してもサハリン北部とは異なり、森林植生としては広葉樹林とエゾマツ林が主体であった。また、明らかに湿原が少なく、海岸線の砂丘・砂州の発達もサハリン北部ほどは見られなかった。

また、聞き取り調査では、ベンケイソウ科の一種 *Orostachys* sp.、ツノハシバミ、アラゲアカサンザシなど、サハリンでは利用が確認されていなかった植物の利用についての情報を得ることができた。これらの結果に関しては今後、順次報告する予定である。

しかしながら、これまでサハリンでは10回の調査を行っているのに対し、アムール川河口地域については3回である。自然環境に関する調査、植物利用に関する聞き取り調査とも、得られたデータはサハリンと同様の精度で考察するためにはまだ十分ではない。植物相の豊かさを勘案すれば、継続して調査を行うことにより、アムール川河口地域のみで利用している植物はさらに多く確認できるものと予想できる。また、サハリンでは利用しているが、アムール川河口地域では利用が確認できない植物も確認していく必要がある。今後はさらに調査を重ねて情報を蓄積することで、2つの地域の自然環境および植物資源利用の特徴をより明らかにし、その相違点を明確にしていくとともに、それらの関わりについての分析を進めることが必要である。

謝辞

サハリン訪問に当たっては、テムル・ミロマノフ館長 Темур Георгиевич Миромановをはじめ、サハリン州郷土博物館のスタッフのみなさんに様々な便宜をお図りいただいた。フィールド調査においては、ガリーナ・ローク氏 Галина Демьяновна Лок（故人）、アレクサンドラ・フリユン氏 Александра Владимировна Хурьюнほか大勢のみなさんに、調査のコーディネートおよび現地での生活の面でお世話いただいた。ハバロフスク地方でも調査に当たっては多くの方に助けられたが、ハバロフスク州郷土博物館のマリーナ・オシポヴァ氏 Марина Викторовна Осипова、ニコラエフスク教育大学のマリーナ・テミナ氏 Марина Григорьевна Тэминаのお二人には特に感謝申し上げます。調査中は、個別にお名前を挙げるのが難しいほどたくさんの方にお話を伺ったが、ここでは特に、ネクラソフカのオリガ・コヴァン氏 Ольга Борисовна Кованならびにヴァレンティナ・チャフカン氏 Валентина Филимоновна Тявкан、ニコラエフスクのアレ

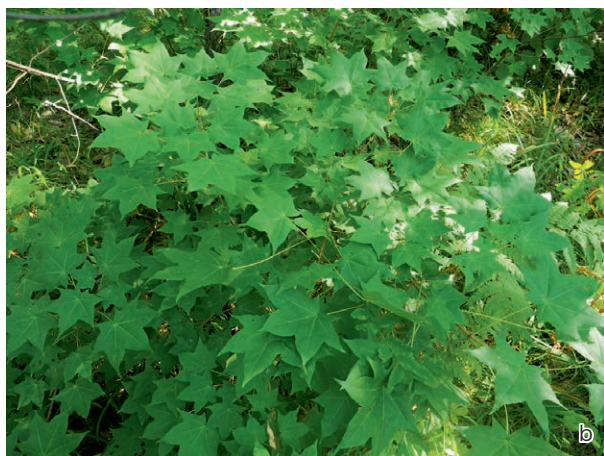


図17 アムール川河口地域で確認した植物

- a. モングリナラ林
- b. エゾイタヤ
- c. ツノハシバミの果実
- d. アラゲアカサンザシの果実

クサンドラ・ヴィンGUN氏Александра Михайловна Вингунに篤くお礼申し上げます。また、同僚（当時）の田村将人氏（現・文化庁文化財部伝統文化課）からは、本研究の着想を得るきっかけをいただいたことに加え、文献探索にご協力いただいた。そして初めてサハリンを訪れたときから、タチヤナ・ローン元サハリン州郷土博物館長Татьяна Петровна Роонには一方ならぬお世話をいただいた。ローン氏のサポートなしでは、サハリンでの調査は成り立たなかった。以上の諸氏に感謝申し上げます。

本報は、科学研究費助成金（基盤研究（C）、研究課題番号：26370974、研究課題名：「シュミット線とサハリン先住民の植物資源：環境の多様性から見た文化の地域的多様性」、研究代表者：水島未記、研究期間：2014～2016年度）の成果である。また、本報における分析には、科学研究費補助金（基盤研究（C）、研究課題番号：20520724、研究課題名：「ニヴフの植物資源利用および植物語彙に関する基礎情報の収集とデータベースの構築」、研究代表者：水島未記、研究期間：2008～2010年度）によるデータを使用している。

引用文献

- 星川清親 1995. 人間の食糧とされる植物. 植物の世界 14 植物と人間の暮らし(72 食糧としての作物). pp. 162-166. 朝日新聞社.
- 池上次郎 編 1997. ウイルタ語辞典. 北海道大学図書刊行会.
- クレイノヴィチ, E. A. (榎本哲訳) 1993. サハリン・アムール民族誌 ニヴフ族の生活と世界観. 法政大学出版局.
- 潤渇久治・北海道教育庁社会教育部文化課 編 1981. ウイルタ語辞典. 網走市北方民俗文化保存協会.
- 水野一晴 1999. 高山植物と「お花畑」の科学. 古今書院.
- 水島未記 2000. 北東アジアにおけるカバノキ属植物(*Betula*)の分布と樹皮の利用. 「北の文化交流史研究事業」研究報告. pp. 165-178. 北海道開拓記念館.
- 水島未記 2003. 砂漠に浮かぶ森 サハリン北部の車窓風景より. 北海道開拓記念館だより 32(5): 6.
- 水島未記 2007. ブルーベリー・プロブレム. 北海道開拓記念館だより 37(2): 6.
- 水島未記 2010. サハリン先住民の自然資源としての植物: 利用植物一覧. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—北方文化共同研究報告—. pp. 17-52. 北海道開拓記念館.
- 水島未記・エレーナ S. ニトウクク・白石英才・東俊佑 2009. ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用 (3). 北海道開拓記念館研究紀要 37: 23-42.
- 水島未記・池田貴夫 2000. ロシア・ハバロフスク地方における

- ナーナイ、ウデへの植物利用. 北海道開拓記念館研究紀要 28: 39-60.
- 水島未記・池田貴夫 2003. ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用. 北方文化共同研究事業. 2000-2002年度調査報告. pp. 111-136. 北海道開拓記念館.
- 水島未記・白石英才 2011. サハリンのニヴフにおける興味深い利用植物. 北海道開拓記念館研究紀要 39: 125-128.
- 水島未記・白石英才 2013. ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用 (4). 北方地域の人と環境の関係史 2010-12年度調査報告. pp. 39-80. 北海道開拓記念館.
- 水島未記・白石英才・丹菊逸治 2007. ニヴフ語の植物名称: 東方言を中心に. 北海道開拓記念館研究紀要 35: 1-10.
- 水島未記・田村将人 2008. ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用 (2). 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史 - 2005-07年度調査報告 -. pp. 17-78. 北海道開拓記念館.
- 水島未記・タチヤナ P. ローン・会田理人 2005. サハリン先住民の植物利用(ウイルタを中心に). 18世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化 - 北方文化共同研究事業研究報告 -. pp. 125-186. 北海道開拓記念館.
- 中川裕 1990. ㇿㇿとは何か - 北方植物名彙考1-. 千葉大学ユーラシア言語文化論集 2: 51-58. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 沖津進 2002. 北方植生の生態学. 古今書院.
- Takhtajan, A., 1986, Floristic Regions of the World. University of California Press.
- 手塚薫・水島未記 1997. ロシア・ハバロフスク地方におけるエヴェンキ、ネギダール、オロチの植物利用. 北海道開拓記念館研究紀要 25: 97-119.
- Баркалов, В. Ю., Таран, А. А., 2004, Список видов сосудистых растений острова Сахалин. Растельный и животный мир острова Сахалин (Материаль Международного сахалинского проекта) Часть 1, 39-66. Дальнаука, Владивосток.
- Колосовский, А. С., 1989, Растения-обереги в религиозных представлениях нивхов. Полевые исследования на Сахалине и Курильских островах. 79-89. Южно-Сахалинск. (「ニヴフの宗教的認識における呪符としての植物」)
- Колосовский, А. С., 1990, Применение лекарственных растений аборигенами о. Сахалина. Краеведческий Бюллетень, 1990 (4): 120-142. Южно-Сахалинск. (「サハリン先住民の薬用植物の使用」)
- Колосовский, А. С., 2004, Растительная символика в ритуалах медвежьего праздника у нивхов. Известия Института Наследия Бронислава Пилсудкого, 8: 214-259. Южно-Сахалинск. (「ニヴフのクマ祭り儀礼における植物の象徴的意味」)
- Крейнович, Е. А., 1973, Нивхгу. Загадочные обитатели Амура и Сахалина. Наука. Москва.
- Крестов, П. В., Баркалов, В. Ю., Таран, А. А., 2004, Ботанико-географическое районирование острова Сахалин. Растельный и животный мир острова Сахалин (Материаль Международного сахалинского проекта) Часть 1, 67-92. Дальнаука, Владивосток.
- Кривошеев, В. Г., 1984, Наземные млекопитающие дальнего востока СССР.
- Матюшков, Г. В., Соловьёв, А. В., Мельников, О. А., 2014, Естественная история Сахалина и Курильских островов. Геологическое прошлое острова Сахалин. Сахалинское областное книжное издательство Сахалинский областной краеведческий музей. Южно-Сахалинск.
- Оненко, И. И., 2016, Растения, используемые коренными малочисленными народами Севера Сахалина и Приамурья. Южно-Сахалинск.
- Роон, Т. П., 1996, Уйльта Сахалина. Историко-этнографическое исследование традиционного хозяйства и материальной культуры XVIII - середины XX веков. Сахалинское областное книжное издательство Сахалинский областной краеведческий музей. Южно-Сахалинск. (タチヤナ・ローン 2005. サハリンのウイルタ 18-20世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究. 北海道大学大学院文学研究科.)
- Смирнов, А. А., 2002, Распространение сосудистых растений на острове Сахалин. Институт морской геологии и геофизики Дальневосточное отделение РАН, Южно-Сахалинск.

Plant Resources Utilization by the Nivkh from the Point of View of the Influence from Flora and Vegetation of Sakhalin

MIZUSHIMA Miki, SHIRAISHI Hidetoshi, and TANGIKU Itsuji

This article explores the relationship between the natural environment and the utilization of plant resources by the Nivkh in Sakhalin. First, this article provides an overview of the natural environment of Northern Sakhalin. This is followed by citing several prior studies on the utilization of plant resources by the Nivkh and an analysis of problems. The characteristics of the Nivkh's use of plant resources in Sakhalin are reviewed and then the relationship between the natural environment of Northern Sakhalin and in particular with the flora and vegetation is examined. Finally, a comparison is drawn with the Nivkh of coastal estuary region of the Amur River.

The northern side of Schmidt's line on Sakhalin is home to many Dahurian larch forest and expansive wetlands. The vegetation is rather simple for the latitude and closer to one in the areas of higher latitude. Along the coast, sand dunes and sand-

banks have developed. The reason for these features is the areas consist mainly of thick deposits of sand carried by the Amur River and therefore the soil development is poor.

The Nivkh's utilization of plant resources on Sakhalin has the following characteristics:

1. Heavy use of wetland plants
2. Heavy use of sandbank and sand dune plants
3. Extreme importance of berries
4. Importance of Liliaceae species bulbs

The first and third features are similar to indigenous peoples living at higher latitudes. The characteristics of the Nivkh's utilization of plant resources reflect the environment of Central and Northern Sakhalin where the Nivkh have traditionally lived and it is considered to be strongly influenced by the stratum of sand brought by the Amur River.